

聖書：士師記 20：1～48

説教題：兄弟と戦う

日時：2015年3月8日

士師記もあと2つの章となりました。今、私たちは士師記の最後のエピソードを見ています。19章から21章は一まとまりの記事ですが、今日はその真ん中の章です。前の19章では次のようなストーリーが語られました。ある一人のレビ人が実家に帰ってしまったそばめを引き戻しに出かけて、そこからの帰りにベニヤミン族の町ギブアに泊まりました。すると町の人々は、その家に押しかけて来て、「私たちはここにきた男を知りたい！その男を引き出せ！」と要求しました。彼らは旅行者であるこのレビ人を同性愛の対象にしようとししました。イスラエルの町がかつてのソドムのようになっていました。するとそのレビ人は、せっかく連れ戻したそばめを外に出してしまいます。すると人々は彼女を夜通し暴行し、彼女は結局死んでしまいます。レビ人はその死体を12の部分に切り分け、イスラエルの国中に送って言います。「こんなことは今まで起こったこともなければ、見たこともない。このことをよく考えて、相談をし、意見を述べよ。」これに対してイスラエルはどう応答したかがこの20章に記されています。

これを聞いてダンからベエル・シェバまで全部族の代表者たちが集まります。そしてレビ人が行なった事の次第の説明が4節からなされます。「殺された女の夫であるレビ人は答えて言った。『私は、そばめといっしょに、ベニヤミンに属するギブアに行き、一夜を明かそうとしました。すると、ギブアの者たちは私を襲い、夜中に私のいる家を取り囲み、私を殺そうと計りましたが、彼らは私のそばめに暴行を加えました。それで彼女は死にました。そこで私は、そばめをつかみ、彼女を切り分け、それをイスラエルの相続地の全地に送りました。これは、彼らがイスラエルの中で、みだらな恥ずべきことを行なったからです。さあ、あなたがたイスラエル人のすべてよ。今ここで、意見を述べて、相談してください。』」これは前の章の要約のように思えますが、良く読んだ人が感じることは、これは彼にとって都合の良い説明になっているということです。これを読むと、ギブアの人たちだけが悪いように語られています。しかしなぜレビ人のそばめは殺されてしまったのでしょうか。それは他ならぬ彼が彼女を外に出したからではないでしょうか。自分の命を救おうとして、彼女を外に投げ出したからではないでしょうか。しかし彼はそのことについては触れず、これを聞く人々がギブアの人々に反感を持つようにだけ語っています。

この結果、イスラエル人は立ち上がり、ギブアに行ってベニヤミンがしたこの悪に報復しようと一致団結します。大いなる皮肉は、これまでバラバラであったイスラエルがここで一つにまとまっていることです。1 節と 8 節と 11 節に出て来る「こぞって」という言葉は、直訳では「ひとりの人のように」です（欄外注 1）。これまでこんな姿を見せなかった彼らが、ここで急に一人の人のように行動しています。ずる賢いレビ人の口車にまんまと乗せられて。

イスラエルの諸部族はベニヤミンの諸族に人をやり、「ギブアにいるあのよこしまな者たちを引き渡せ！イスラエルから悪を除き去ろう！」と迫ります。しかしベニヤミンはこれを聞き入れません。何が正しく何が間違っているかは関係なく、自分たちの仲間をかばおうとします。そして兵士を召集してイスラエル人と戦おうとさえします。たった一部族では勝ち目なしと思われるところですが、ベニヤミンには左利きの精鋭が 700 人いました。彼らはみな一本の毛を狙って石を投げて、失敗することがありませんでした。そう言えばかつて左利きのエフデというさばきつかさがいましたが、彼もベニヤミン出身でした。この左利きの特殊部隊をもって、彼らは全イスラエルに戦いを挑んだのです。こうしてイスラエルは内戦状態に入ったのです。

さてイスラエルは剣を使う者 40 万人を召集します。対するベニヤミンは、15 節にあるように 2 万 6 千人です。圧倒的な差があります。イスラエル人はまずベテルに上り、主に問います。「だれが最初に上って行って、ベニヤミン族と戦うべきでしょうか。」すると主から「ユダが最初だ」との答えを頂きます。ところがこの主の指示に従って出て行ったものの、結果は惨敗。2 万 2 千人が殺されてしまいます。イスラエルは夕方まで泣き、再び主に伺います。「兄弟ベニヤミン族に近づいて戦うべきでしょうか。」すると主は「攻め上れ」と言われます。そこで次の日に戦いに出て行きますが、また敗北。今度は 1 万 8 千人が殺されてしまいます。なぜこのような結果になってしまったのでしょうか。多くの注解者が指摘するのは、主の前でさばかれるべきはベニヤミン族ばかりではなかったからということです。これまで見て来ましたように、イスラエル人は主に正しく従うことをして来ませんでした。主の御言葉ではなく、自分の目に良いと見えるところから従って歩んでいました。そんな彼らが、突然義憤らしきものに駆り立てられて行動しても、主は良しとされぬ。普段、主と正しい関係に歩んでいない人が、ある時だけ主を都合良く利用しようとしても、そうは問屋が下ろさない。彼らは自分たちもまた主の前に正しく歩んでいない者たちであることをこうして思い知らなければならなかったのです。

26 節でイスラエル人は全民こぞってベテルに上り、泣き、断食し、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげます。そして 3 回目に初めて主から勝利の約束を頂きます。28 節で主は「攻め上れ」と語られただけでなく、「あす、彼らをあなたがたの手に渡す」とはっきり勝利の約束もいただきました。こうして彼らは出て行きます。今回取った方法は伏兵を置いておくというものでした。今までと同じように出て行ってベニヤミン族と打ち合いますが、打ち負かされた振りをしてベニヤミン族を町の外へおびき出します。その後で伏兵がもぬけの殻となった町に入って行って火をつけます。そして戦意喪失するであろう彼らを挟み撃ちにするのです。かつてヨシュア記 8 章でアイという町を攻略した時のことを彷彿とさせます。この結果、ベニヤミン族は大打撃を受けます。最初彼らには 26000 人 + α の兵士たちがいました。それが 44 節では 1 万 8 千人倒れてしまいます。次いで 45 節では 5 千人、また 2 千人が討ち取られ、残りは 47 節にあるように、何とたったの 600 人になってしまった。彼らは荒野の方に向かってリモンの岩に逃げ、そこに 4 ヶ月間隠れました。イスラエル人は引き返して来て、48 節でベニヤミンの町々を全滅させたことが書いてあります。無傷のままだった町をはじめ、残されていた家畜、見つかったものすべてを剣の刃で打ち、すべての町々に火を放ったのです。こうして荒野に隠れた 600 人の男子をのぞいて、ベニヤミン族は壊滅状態となったのです。

このような士師記 20 章は、私たちに何を語っているのでしょうか。まずはっきりしているのは、主がベニヤミンの悪をさばかれたということです。35 節にはっきりそのことが述べられています。「こうして、主がイスラエルによってベニヤミンを打ったので、イスラエル人は、その日、ベニヤミンのうち 25100 人を殺した。」これは聖書自身の説明です。ギブアの悪はやはり見逃されるべきものではなかった。また彼らを同族だからと言ってかばったベニヤミンもただでは済まなかった。この結果、彼らは町も所有物も失い、たったの 600 人になってしまいました。彼らが自分たちの悪のために払った代償はあまりにも大きかったのです。しかしさばかれたのはベニヤミンだけではありませんでした。先に見たように、他の部族も先の 2 回の戦いで相当の損害を受けました。1 回目の戦いで 2 万 2 千人、2 回目の戦いで 1 万 8 千人、合計 4 万人。最初は 40 万人の兵士がいましたから、その 10% も失ったこととなります。

この章に私たちが見ることは何でしょうか。それはイスラエルの兄弟同士の戦いです。本来イスラエルはカナン人を相手に聖絶するという戦いをすべきでした。しかしこの章で彼らが一人の人のようになって戦った相手は何と自分たちの兄弟でした。23 節と 28 節で

そのことが強調されています。彼らは主に「私の兄弟ベニヤミンと戦うべきでしょうか」と問うています。そしてその兄弟に対して、ほとんど聖絶に等しきことを行なっています。このことはイスラエルの中に聖絶されなければならないものがあったということを示しているのではないのでしょうか。イスラエルの敵はイスラエルの内部にあった。そのためカナン人に行なうべきことを自分たちに向かって行なわなければならなかった。自分で自分に向かって切り付けざるを得ない状況となってしまった。かつてアイを攻略する時に行なったのと同じことを、自分の兄弟に対して行なわなければならなかった。そしてこのさばきは特にベニヤミンに対してなされたとは言え、イスラエル全部族も相当の痛手を負ったのです。これはこの時のイスラエルがいかに墮落した状態にあったかを物語っています

しかし今日の章にある唯一の慰めにも注目したいと思います。それは今日の章にはともかくそこに主がいて下さったということです。この士師記最後の17章～21章は人間の悪ばかりが出てくる箇所です。困惑するような罪ばかりが連続して記されています。そのため、非常に説教がしにくい箇所です。特に一番説教を難しくしているのは、主がさっぱり出て来ないということです。主がこのように言われたとか、主がこのように行動されたとあるなら、そこからメッセージを取り次ぐことができますが、それが全く出て来ないと一体何をどう語ったら良いものか、手掛かりがなくなってしまう。しかしそのような17～21章において今日の章にだけは主が出て来ているのです。これはしばらく主の不在を味わった者にとって大きな慰めです。主はこの士師記後半の箇所から去られてしまったのではない。主はイスラエルを見捨ててどこかへ行ってしまうのではない。なお主はここにおられ、イスラエルが主に問うた時に答えて下さったのです。

確かにその答えを頂いたからと言って、人間の目に願わしいことが起こったわけではありませんでした。むしろ結果的に大変な苦しみを味わうこととなりました。兄弟同士で争い合い、終わってみれば疲労感と幻滅感のみが残るようなみじめな状態でした。しかしそれでもここには主がおられて事柄全体を導いておられたということを知る慰めがあるのではないのでしょうか。今日の箇所はただイスラエルが勝手に歩んだ箇所ではないのです。とにかく彼らは主に尋ね求め、主の指示に従って行動しました。最終的にベニヤミンもその他のイスラエルもさばかれてこの章は終わっていますが、それでもこれは主との関係の中で進められた一章であったのです。

私たちの歩みはどうでしょうか。自分の目に正しいと見える道に歩むなら、私たちも今日の箇所のような報いを刈り取ることになります。やがて失望と落胆と幻滅を味わわなく

てはなりません。主はそのようなところに祝福を用意していないのです。主はご自身に従う道に、まことの祝福を用意しておられます。私たちはその祝福にあずかるために、自分の目に良いと見える道を行くのではなく、主と主のみことばに私の生活を支配して頂く者でありたい。もしかすると私たちはこの時のイスラエルのように、主のさばきに服している自分を発見するかもしれません。うめいている自分を思うかもしれません。しかしそれなら、彼らのようにとにかく主にその状況に関わっていただくことを求めれば良い。主がこの状況をご支配くださるよう祈り求めれば良い。主はこのようなイスラエルから去られず、なおもそこにいて下さって、彼らに答えて下さいました。そのように私たちも主の御名を呼び、主に一切の状況を支配していただき、主が与えて下さるものを受けとって従っていくところに、主のあわれみによる望みと祝福の歩みとがあるのです。